

+ 6 0 【むはい】

「【むてき】のことは、ようわかった。たしかに【むてき】じゃのう。かいじいよ、はなしを、ふりだしにもどすが、ええか。わしは、ぎせいしやを、いっばいつくって、えいゆうを、ひとりもつくらなかった、そういうおばけをしりたいんじゃ」

「いないことはありませんが、金ちゃんには、おすすめでできませんね。従って教えることもできません」

懐爺はわざと意地悪爺さんの顔をつくりました。

「なぜじゃ」

「金ちゃんは、また退治に行こうとするでしょう。【むてき】なら問題ないから安心していましたが、【むはい】は安心できません」

「いうた、いうた。【むはい】が、そのおばけじゃな」

「しまった。口がすべりました。口は災いの元です」

「【むはい】にあいたいのう。【むはい】をたいじしたいのう」

「簡単ではありませんよ。【むはい】退治に行ったひとは、誰も帰ってきません」

「だれもかい」

「誰もです」

「ならば、その〈だれ〉になりたいのう」

「いやはや、それは、いくらなんでも」

「【むはい】は、どんなわるさを、するんじゃ」

「【むはい】はわるさをしません」

「せんのか」

そんなばかな。

「つまり【むはい】は、わるさをする人間を、こらしめるおばけなのです」

「ならば、たいじの、めいもくがないのう」

「親の仇なんか、どうでしょう。わるい親でも親は親」

「おやおや。かいじいも、わるだくみが、うまいのう。このさい、それでもせんと、【むはい】とはたたかえんからのう」

「いいんですか。わるさをする人間たちは、次々に【むはい】退治にで

かけるのですが、ひとりも帰ってきませんよ。そうして中川の川下に死体が浮かぶのです」

「そうか。【むはい】も【むてき】とおなじところにおるんか」

「しまった。口がすべりました。口は災いの元です」

懐爺は【べろりんまん】より長い舌をだしました。

「わざとすべっとるんじゃ、あるめいのう」

「いやその、それはそれとして、なんともはや」

「まあええ。また、はたき、もっていけばええんか」

「【むはい】は、無敗ですが、無肺でもあります。肺がなくても平気なおぼけなのです。ですから、金ちゃんは、酸素吸入器（さんそきゅうにゅうき）をもって」

「もてるかい。もっと、かるいものにせいや」

「それなら、風船で」

「ふうせんかい。よかろう」

威張ってそう決めましたが、風船さげて行くのではありません。

空気を入れた風船百個、それらに、重い重い酸素吸入器をぶらさげて行きました。

どちらも、どこから調達（ちょうたつ）したのか、懐爺が用意してくれたのです。

「おうい、おうい、【むはい】やーい」

ぼくは大声をあげました。

「わしじゃ、きんちゃんじゃ。でてこい、でてこい、【むはい】ちゃーん」

しつこく何度も大声をあげると、中川の上流のさらに奥のほうから、ぼくの声の百倍くらいの大声がきこえます。

「ぼく【むはい】。なにかご用かな」

「たいじにきたんじゃ」

「退治とは、一大事」

「じんじょうに、しょうぶせい」

「ぼく【むはい】。退治されるほど、悪い事したかなあ」

「それは、かいじいに、きいとらん」

「そういうの、冤罪（えんざい）っていうのよ」

「うるさい。おまえは、いちばんつよい、おばけじゃ。まけたことのない、おばけじゃ。そういうおばけは、よほどたいじせにゃならん。してからに、わしがあいてじゃ」

「それは大変。さらばさらば。ぼく【むはい】。逃げるが勝ちよ。すたこらさっさ」

【むはい】の声が、しだいに遠ざかりました。

こりゃどうも、なにか同じ体験がある。

そうか、【むてき】と同じだ。

「こら、かいじい、【むはい】は【むてき】と、おなじおばけじゃないんか」

と懐爺にいうと、

「ばれましたか」

「ばれるにきまっとる。こんなよけいなもの、いらん」

見ると、酸素吸入器がありません。

おそらく風船が萎（しぼ）んだので、そのままあそこに置いたままになっているのです。

「かいじい、やったのう」

「ばれましたか」

そうなのです。

ぜんぶ懐爺のたくらみだったのです。

懐爺の話では、【むてき】すなわち【むはい】の肺結核が悪化して苦しんでいるので、懐爺がぼくを利用して、酸素吸入器を【むはい】に届けてあげたのです。

いまごろ【むはい】が苦しみから解放されているとおもうと、ぼくは懐爺に文句をいえませんでした。